

限界集落における一人暮らし高齢者のソーシャル・サポート活用プロセス

渡 辺 裕 一¹⁾ 大 塚 康 平²⁾

The process of utilizing social support for the elderly who live alone in a Marginal community

Yuichi Watanabe, Kohei Ootsuka

抄 録

高齢化率が50%を超えた地域では、集落機能の維持が難しくなり、日々の暮らしを維持することが限界にきている。このような集落を限界集落と呼ぶ。

本研究では、限界集落の一人暮らし高齢者のインタビュー・データについて、彼らのソーシャル・サポートの活用プロセスに焦点をあて、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）により分析を行った。

その結果、血縁・地縁に基づき自動的に提供されるサポートの手段的サポートが不十分化しており、それに対応すべく一人暮らし高齢者自身が集落外に住む家族や近隣住民にサポート依頼をして充足したり、現状に合わせてあきらめたりしている様子が明らかとなった。また、お茶のみや頻繁な行き来など豊かな情緒的サポートを相互に提供し合える習慣を持っていることも明らかになった。

これらから、彼らの現在の生活のあり方を尊重しつつ、血縁・地縁の延長線上として手段的サポートを依頼できる選択肢を整備する必要性が考察された。

キーワード：限界集落

一人暮らし高齢者

サポート

1) 健康科学大学

2) 安曇総合病院

1. 緒言

わが国の総人口に65歳以上の高齢者人口が占める割合は、平成19(2007)年10月1日現在21.5%(前年20.8%)となり、はじめて21%を超えた(総務省, 2008)。推計によれば、平成27(2015)年には、高齢化率は40.5%に達し、国民の2.5人に1人が65歳以上の高齢者となる社会が到来するとされている(総務省, 2008)。

この推計の結果自体、我われ国民にとって大きなインパクトを持っている。しかし、これは「国」を単位とした統計の結果であり、実際の地域の状況を想像するには不十分な情報であるといわざるを得ない。高齢化の状況は地域によって大きく異なっており、実際に生活する地域はより小さな範囲に限定されているからである。例えば市町村を単位として比較してみると、平成17(2005)年時点で最も高齢化率が高かった市町村は53.4%であるのに対し、最も高齢化率の低かった市町村は8.5%である(総務省, 2008)。

特に高齢化率の高かった地域に注目してみると、そこはかつて農林業等で栄え、農林業の衰退とともに過疎化の問題に直面した地域であることが分かる。近年では、このような地域で高齢化率が50%を超えた地域は、日々の暮らしを維持することが限界に来ていることから「限界集落」と呼ばれ、徐々に社会的な注目を集めはじめた。特に中山間地域や離島を中心に全国で急増している(朝日新聞, 2007年9月6日)。「限界集落」という用語は社会学者の大野晃氏による造語であるが、その問題意識の高まりに伴い、社会的に定着しつつあるといっても良いのではないだろうか。

限界集落の特徴について、2007年に出された「限界集落における集落機能の実態に関する調査報告書」では、その高い高齢化率のほか、働く場がなくなり、日々の買い物や通院に事欠き、田畑や山林の管理、冠婚葬祭も難しくなり、その末に待ち受ける「廃村」へと向かっていくことが指摘されている。若者は集落外へと生活の場を求め、集落に残るのは高齢者であり、さらに高齢化率が高まる状況が続いていく。

そこで同時に増加しているのが、一人暮らし高齢者である。子ども世代が集落外に生活の拠点を移した後、高齢夫婦世帯となり、配偶者を失うことで一人暮らしとなるケースが多い。

大塚ら(2004)は、過疎地域に生活する高齢者にとってどのようなソーシャル・サポート・ネットワークを取り結ぶかが生活課題の解決の重要な鍵になると指摘している。つまり、地域における個人間の結びつきをどの程度持っているか、また、どの程度交流をしているか、ということが、過疎地域の高齢者が日々の生活を送る上で重要な要素であることが指摘されており、限界集落の一人暮らし高齢者にとってその重要性はより一層高いことが推察される。

限界集落の一人暮らし高齢者は、地域生活の中でどのような人との間に個人的結びつきを持っているのだろうか。そして、その個人的結びつきにおいてどのような交流を持ち、どのようにそれらのサポートを活用しながら、生活課題の解決と生活の維持をして

いるのだろうか。

限界集落で暮らす高齢者と接していると、彼らの多くは、居住年数も長く、美しい自然や代々受け継いできた家、地域での生活の歴史、苦楽をともにした仲間の存在などに強い愛着を感じ、生活を継続することを希望しているということが伝わってくる。話を聞くと、「ここがいい」、「ここが一番だよ」という声が聞こえてくる。

本研究では、限界集落で生活する一人暮らし高齢者の生活維持に必要な個人間の結びつきを検討し、生活課題の解決等に向けてサポートを活用するプロセスを明らかにすることを目的とする。

2. 研究の対象と方法

1) 対象

対象は、限界集落A（B県C市D町）で生活する一人暮らし高齢者である。調査の対象は、対象地域で一人暮らしをしている高齢者61人のうち、社会福祉協議会職員などの仲介によりインタビューへの協力に承諾が得られた17人である。

この地域は、平成19（2007）年1月時点において総人口542人、うち65歳以上の高齢者人口が284人であり、高齢化率は53.2%という状況である。

2) データ収集の方法

調査の実施時期は、平成19（2007）年8月上旬から9月上旬である。データの収集には、半構造化面接によるインタビュー法を採用した。調査は、対象者の自宅や地区を担当する社会福祉協議会にて実施した。

インタビューでは、日常生活の様子、情緒的サポートや手段的サポートをどのような人に依頼しているか、どのような人が提供してくれているかなどについてたずねた。

インタビューは対象者の同意を得て、ICレコーダーに録音を行なうとともに、メモを取った。面接時間は短い場合で10分程度、長い場合で40分程度であった。

3) データ分析の方法

インタビューによって得られた音声データを逐語録で文字に起こして文字データとし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）（木下，1999；2003；2007）に準拠して分析を行った。

M-GTAは、データの解釈から説明力のある概念の生成を行い、そうした概念の関連性を高め、まとまりのある理論を作る方法である（木下，2007）。分析テーマに照らしながらデータを解釈し、分析ワークシート（表1）により説明的な概念を作成する。そして、この概念間の関係にもとづいてカテゴリーを作成し、現象のプロセスを一定の方向をもつ形で結果図として表す。

この結果についてそれ自体が正しいかどうか、妥当性があるかどうかということを論点とせず、実践現場でこの結果を応用し、現実的問題に対して有効であるかどうかを試

されることによって、評価されることを重視している。

実践的領域の研究で、社会的相互作用のレベルにおいて、研究対象自体がプロセスの特性を持っている場合、M-GTAを用いるのに適しているとされている(木下, 2007)。

本研究では、限界集落で生活する一人暮らし高齢者の支援という実践的領域において、彼らが社会的な支援を獲得するプロセスに焦点をあてて分析を試みる点から、M-

表1 分析ワークシート例

概念名	近隣行き来習慣
定義	近隣の人との間で行き来が習慣になっていて、ほっとできたり、不安が和らいだりすること。
バリエーション (具体例)	<p>④友達遊びに来たときはレーザーディスクのあるからね、カラオケしたり。</p> <p>⑨遠くはあれだけど、近所とかお友達が来てくれる。だから、一人の不安とかはないです。</p> <p>⑩安心だよ。みんな遊びにくる。この辺の人みんなね、くるくる。</p> <p>⑭Aさんが年中きてくれるんです。</p> <p>⑯Bさんがたまにきてくれるしね。この下の区長さんもよってくれるしね。</p> <p>⑰こっちの2人とはね、年中あっちにいたりこっちにいたり。私も行ったりむこうのおばさんがきたり。</p>
理論的メモ	お茶のみの習慣と行き来の習慣は類似か?重複か? 行き来をしながら、お互いに何を提供しあっているのか?

*○は、対象者番号 *バリエーション(具体例)はプライバシー等に配慮し、一部修正

GTAを分析方法として採用することとした。

3. 研究の結果

(本文中の< >はカテゴリーを、“ ”は概念名を表す)

限界集落では、もともと人と人との関係は密接で、お互いに助け合いながら生活をしてきていた。特に、一人暮らし高齢者はその必要性の高さからか、より密接なつながりを形成していたと考えられる。

その中で<親戚・集落内相互支援体制>が伝統的に形成され、機能し、維持されてきていた。依頼していなくても近隣住民が何かしらの買い物を引き受けてくれたり、高齢で役割を果たせるかどうか不安な町内会の役を代わってくれるなど、“自動的サポート提供”が行なわれ、電気がつかなくなったり畑に出ていなかったりしたときには、心配して訪問してくれるような“近隣住民の心配関係が形成”されている。「いつもみんな気にしてくれているから」という関係がそこにはある。

また、近隣住民との間には気軽に「お茶を飲もう」と声を掛け合い、おしゃべりをして情緒的サポートをしあう“お茶のみ習慣”や近隣の人との間で行き来が習慣になっていて、ほっとできたり、不安が和らいだりする“行き来習慣”といった近隣住民同士や

親戚同士の〈安心習慣〉とも言える親戚や近隣住民による集落内の交流が常に行なわれていた。

しかし、次第に全体的な高齢化が進み“サポート提供者の高齢化”が起きたり、サポートを提供してくれていた人たちが集落外へと生活の拠点を移す“住民間サポート提供資源の集落外流出”が起きたりすることによって、住民相互のサポート機能が維持できなくなり、主に「壊れた屋根やお風呂の修理」や「通院の手伝い」、「買い物の手伝い」などといった手段的なサポートが不十分な状態となっていく〈サポート不十分化〉が表面化してきた。

その状況において不十分なサポートの状態を受け入れ、「歩けなくなったら入院するしかない」、「急病間に合わなきゃ、しょうがない」、「買い物はトラックで売りに来るので間に合わせている」など、“地域の現状と生活の調整”をする必要に迫られている。

一部の人は、このような状態に対して、自分から公共的なサービスを優先的に利用したり（“一般・公共サービス優先利用”）、専門家のサポートを受けたり（“専門化サポート利用”）という〈能動的公サポート利用〉を行なうことで、生活を成り立たせようとしていった。

その一方で、「頼めば来てくれるのではないか」と集落外に生活の拠点を移した子どもたちのサポート提供を期待して待っていたり（“集落外居住子サポート提供期待”）、集落外の子どもたちが定期的にサポート提供に来訪してくれることを見込んでいたり（“集落外居住子サポート提供見込み”）、子どもに限らず血縁者なら遠慮もいらぬという“血縁間遠慮不要感”を持つことによって“血縁からのサポート提供を期待”していたりと、〈私サポート提供期待〉を多くの人が持っている。

身体的な機能が維持されている場合や不安感が低い場合には“自立維持意識”を持ち、“私サポートは不要”と考えている人もいる。

〈私サポート提供を期待〉する人は、“自動的サポート提供”が期待できない状況や生活課題の内容の場合、自らサポートの提供を依頼し〈能動的に私サポート獲得〉を行っている。集落外に住んでいる子どもにサポート提供を依頼する“集落外居住子サポート獲得行動”をとったり、集落内外の血縁者にサポート提供を依頼する“血縁サポート獲得行動”をとったり、近隣の人にサポート提供を依頼する“近隣サポート獲得行動”をとったりと、自らの生活課題解決のため、〈能動的に私サポート獲得〉行動をとっていることがわかる。

頼んだ後の面倒などを考えて近隣住民に対してサポートを依頼することを遠慮（“近隣住民サポート依頼遠慮”）したり、“サポート提供依頼対象者を限定”したりしている人もいた。

その一方で、「どの人ももう他人行儀にはしないのよ」、「近所はみんな身内みたいなもんだからね」というように“近隣住民の家族・親戚的位置づけ”が行なわれ、積極的に近隣住民に対して〈能動的私サポート獲得〉行動にいたっている。

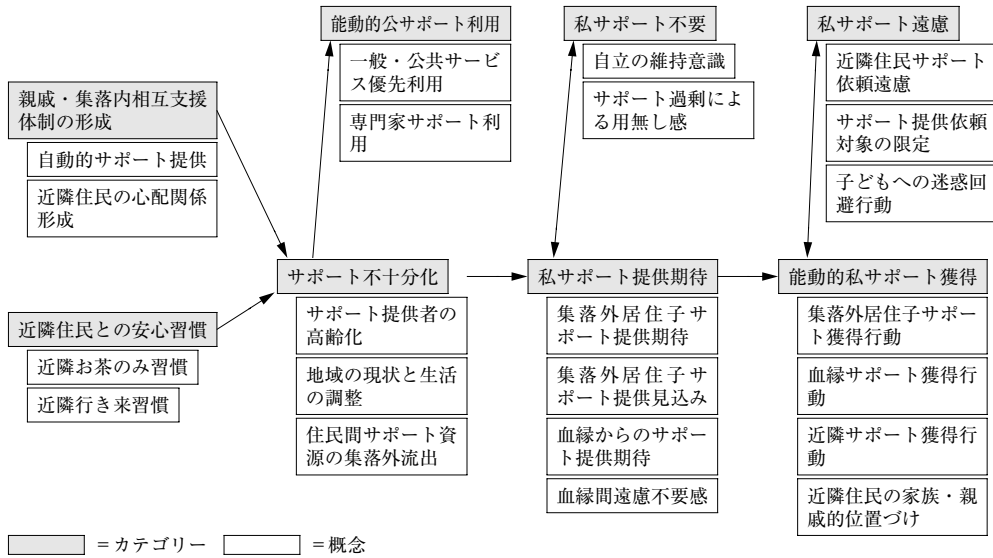


図1 分析の結果

4. 考察と今後の課題

限界集落で生活する一人暮らし高齢者を支える個人間の結びつきは、大部分が血縁・地縁に基づいて形成されていることがわかる。また、限界集落内での結びつきだけではなく、集落外へと生活の拠点を移した血縁関係との結びつきが、一人暮らし高齢者の生活を支えていることがわかる。

近隣住民間の行き来やお茶のみの習慣は、近年都市部などでも見直されてきた習慣であり、住民の結びつきが希薄化した地域では失われつつある習慣であるといえる。この限界集落では、お茶のみの習慣が維持され、同時に、一人暮らし高齢者同士、または一人暮らし高齢者と近隣の住民の個人間の結びつきを維持する機能を果たしてきたことが考察される。

前期高齢者のお茶のみの習慣について検討した齋藤ら（2005）の研究では、お茶のみは友人・隣人・知人からの情緒的サポートと手段的サポート、交流の充実感に影響を及ぼす要因であり、社会的交流としての機能があることが確認されている。

本研究の結果からは、限界集落でのお茶のみ習慣は、情緒的サポートと社会的交流の機能は維持しているながら、サポート提供者の高齢化などに伴い、手段的サポートの提供に困難が生じつつある現状が見えてきている。

不十分になりつつある手段的サポートの担い手としては集落外に居住する子どもや親戚が期待されている点や近隣住民を「家族みたいなもの」と位置づけることで手段的サポートの担い手として期待している点が示唆されている。その一方で、サポートを依頼することへの遠慮や現状で満足しようとする姿勢が見られた点や集落外に手段的サポートを依頼できる人がいるとは限らない点についても考慮していく必要があるだろう。

一人暮らし高齢者が生活の質を維持しながら、限界集落での生活を継続していくためには、どのようなサポートが必要だろうか。本研究の結果からは、豊かな情緒的サポートを維持しながら、乏しくなりつつある手段的サポートを補完し、一人暮らし高齢者の生活継続を支援していく方法の必要性が示唆されている。

ひとつの方法として、手段的サポートの依頼先を血縁・地縁のほかに選択肢を広げる取り組みが考えられる。介護保険などの制度とは別に、手段的サポートを気軽に依頼・提供できる仕組みを整えることである。例えば、何か手段的サポートが必要なとき、社会福祉協議会や地域のNPOなどが窓口となって、ボランティア・コーディネートをこなうことや、有償で手伝いを引き受けてくれる人などを募り、一人暮らし高齢者の依頼にあわせて派遣する事業の実施が考えられる。これらを血縁・地縁の延長線上に準備することによって、現在の個人間の結びつきを維持しながら、愛着のある生活を変えることなく、生活を支える方法を考えていくことが求められているのではないだろうか。

また、地域の一人暮らし高齢者の支援を担っている、サポート提供者の支援にも注目したい。現在、サポートの提供者とサポートを依頼する一人暮らし高齢者は、血縁・地縁を根拠とした個人間の関係によって結びついている場合がほとんどである。サポート提供者にも、苦労や困難を感じ、サポート提供を継続するためのサポートを必要としている場合もあるだろう。しかし、このサポート提供者の苦労や大変さ、困難に関するデータ収集および分析は本稿では十分に実施しておらず、今後の課題としたい。

本稿ではサポートの受領やその可能性を中心に分析を行なっている。インタビューにご協力いただいた一人暮らし高齢者の方々は、日々の生活支援が必要な部分があるものの、畑を耕し、お茶のみをし、趣味活動をして、それぞれが自分のペースで生活を営んでいる。この一人ひとりの生活のあり方を尊重しながら、側面的な支援の提供が求められているといえよう。

文献

- 大塚洋子, 牧田実 (2004) 「過疎地域におけるソーシャル・サポート・ネットワークと社会的資源」『家族関係学』, Vol. 23, pp. 61-77.
- 木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂.
- 木下康仁 (2005) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い—』弘文堂.
- 木下康仁 (2007) 『実践的質的研究法—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて—』弘文堂, P. 35.
- 財団法人農村開発企画委員会 (2007) 「限界集落における集落機能の実態に関する調査報告書」.
- 齋藤美華, 小林淳子, 服部ユカリ (2005) 「前期高齢者の「お茶飲み」がソーシャル・サポートと主観的幸福感および交流の充実感に及ぼす影響」『日本地域看護学会誌』, 第7巻2号, pp. 41-47.
- 総務省 (2008) 『平成20年版高齢社会白書』, p. 2-8.

Abstract

A community which has greater than half of the population over the age of 65 faces difficulties in maintaining its function needed for the daily lives of its residents is called a Marginal community.

This study focused on the elderly who live alone in the Marginal community. Individual interviews, in which the participants were questioned about their daily lives and their process of using social support, were conducted. The data was analyzed by the Modified Grounded Theory Approach (M-GTA).

The results reveal that these elderly receive plenty of emotional support by having the custom of drinking tea together and interacting with each other. However, declining support resources from their relatives or neighbors forces them to seek support from relatives who lives outside the community or even to give up on such support.

The study suggests that it is necessary to provide reliable instrumental support for the elderly in a Marginal community. Such support should be implemented in a way that the elderly can choose resources while maintaining their daily lives.

Key Words : The Marginal community
The elderly who live alone
support